

帰国児童生徒の英語保持についての心理学的考察

- バイリンガルメモリーの文化的要因の視点から -

清泉女学院短期大学 中沢保生

A Psychological Study of English Language Retention in Japanese Returnee Children

- A cultural aspect of bilingual memory -

Seisen Jogakuin College NAKAZAWA, Yasuo

成長過程の時期を海外で生活し、その後日本に帰国した帰国児童生徒の外国語の保持または喪失については、これまでさまざまな研究がされてきたが、個別事例研究を除くと追跡調査による保持または喪失のプロセスを解明した研究はほとんどなされていない。本論では、言語保持・言語喪失の研究モデルに従い、そのための基礎的なデータを得るための問題設定と予備的調査による結果の分析を行った。その際、最近のバイリンガリズムの心理学的研究の流れを背景とし、言語の処理過程研究など普遍性に力点を置く立場ではむしろ誤差要因として扱われた文化的要因の影響を強く受ける語彙表象（バイリンガルメモリー）を取り上げた。本予備調査では、英語圏在住の児童生徒を対象に語彙想起課題を実施し、特に小学校時期から長期滞在した児童ほど想起する語彙の数も多く、語彙水準も高い結果が得られた。

【キー・ワード】 帰国児童生徒、英語保持、バイリンガルメモリー、バイリンガリズム

School-aged Japanese returnee children, who return to Japan after fairly extended stay abroad with their family, are potential bilinguals. From the view point of universal bilingualism research, cultural and social context is recognized as fuzzy factors or a source of errors. Bilingual memory, however, is constructed of concepts, which are shaped through cultural experience. In this research, psychological processes of English language retention in Japanese returnee children are investigated from a new perspective, the socially and culturally contextualized aspect of bilingualism.

【Key Words】 Japanese returnee children, Bilingual memory, Bilingualism

問 題

1. 言語喪失と言語保持の定義とモデル

ガードナーは一般的な定義として、言語保持とは当初習得した言語の使用能力が維持または向上

することであり、言語喪失とはその能力水準が低下することであるとした（Gardner 1982）。しかしこれではあまりに漠然としているため、研究のデザインを描けるよう時間経過に伴う言語能力変化のモデルを彼は提案している（図1）。

図1．言語保持の操作的モデル



この中でTIME1は言語習得の開始時点、TIME2はその言語習得の中断または終止時点を表し、このTIME1からTIME2までの時間経過期間を言語習得期とする。この言語習得期において、個人は言語を学習したり言語使用を経験する。一方、TIME3は言語習得の中断または終止時点TIME2以降の任意の時点で、具体的には言語保持や喪失の水準を測定する観測時点である。このTIME2からTIME3までの時間経過期間を潜伏期とする。言語保持または喪失の過程を追跡的に調査する場合、観測時点はTIME3、TIME4、TIME5など複数になることもあり得る。この潜伏期においては、計画的、意図的な言語学習は行われず、その言語を使用する身近な機会や必要性も消失する。このモデルを基にガードナー（1982）は言語保持・喪失についてより操作的な定義を試みている。すなわち、言語習得の中断または終止時点TIME2で測定された言語能力水準を言語保持・喪失のベースライン（基準値または初期値）として、このベースラインと比較して観測時点TIME3での言語能力水準が同程度もしくは向上している場合、これを言語保持（language retention）と定義し、この潜伏期の間に低下が見られた場合は言語喪失（language attrition）と定義した

この定義に基づくことにより、言語保持・喪失の実証的研究デザインを描いたり作業仮説を立てることが可能となり、複数の研究結果の比較を通してその検証や研究的蓄積が可能となる。言語保持・喪失には個人差があるのだろうか、それとも一定のパターン（規則性）があるのだろうか。どのような要因がその個人差を生んでいるのだろうか。第1言語と第2言語の組み合わせによって、保持や喪失のパターンに違いが生じるのだろうか。様々な側面を持つ言語能力のうち、保持されやすいものと喪失されやすいものがあるのだろうか。ある要因Aが存在すると保持が可能となり、その要因Aが働かないと喪失が起こるのだろうか。それともある要因Aが存在すると保持が可能となり、別の要因Bが働くと喪失が起こるのだろうか。このような研究的関心やデザインのもとに第2言語の保持・喪失研究が進められてきた。上記のような操作的な定義を導入することにより、言語保持と言語喪失は同一のモデルで定義することが可能となり、したがって逆説的ではあるが、言語保持と言語喪失は同一現象の裏と表の関係にあるのか、まったく別の現象なのかを探ることも可能となる。

なお、本章では帰国児童生徒の英語保持というテーマを扱っているが、本来ならば英語保持と英

語喪失を区別する必要があると言える。しかし、無用な混乱と煩わしい記述を避ける意味と、帰国児童生徒の英語が失われるよりは保持されたほうが好ましいのではないかという価値的判断とから、今後は特に必要がない場合は言語保持と言語喪失を併記せずに、言語保持、英語保持、第2言語保持という用語に統一する。これはあくまで便宜上の措置であって、言語喪失という側面を議論から外すことは意味しない。

2. 第2言語保持・喪失についての研究

「言語消滅」(language loss)の現象には、大きく分けて二つの側面がある。一つはその言語が使用されなくなり社会から消失してしまう「言語の死」(language death)と呼ばれる社会的レベルの現象であり、他の一つは個人によって習得された言語が障害によって失われたり(いわゆる失語症)、しばらく使用しない間に錆び付いてしまう「言語喪失」(language attrition)という個人的レベルの現象である。ランバートとフリードによると、個人における言語保持についての体系的な研究は、いわゆる失語症の領域を除けば1980年にペンシルバニア大学で開催された言語技能の喪失に関する会議(the Conference on the Attrition of Language Skills)がその出発点の一つとなっている(Lambert & Freed 1982)。彼らの指摘では、

この時点で第1言語と第2言語の習得に関する研究はかなり蓄積されていたのに対し、一度習得された言語技能の保持についてはほとんど研究的関心が向けられることなく、習得と使用の中断後に起こると予想される言語技能の衰えの問題についてはさらに関心が向けられてこなかった。(中略)言語喪失現象一般についての研究の状況がこうであるからには、ましてや第2言語の喪失についての体系的な研究は皆無に等しかった(前掲書 vページ)。

この会議の開催以前に目を向けると、ウィリアムソンの調査では1946年から1979年の間に第2言語保持に関する研究はわずかに12件しかない(Williamson 1982)。その後1986年にオランダで開催された第2回目の会議を経て、第2言語保持に関する研究は着実に蓄積が進んでいくことになる(ハンセンとリーツ=クラシゲ参照, Hansen & Reetz-Kurashige 1999)。

3. バイリンガルメモリーの研究動向

(1) バイリンガリズムの類型

バイリンガル(二言語使用者)が二つの言語をどのように頭の中で区別しているか、それを言語学的、心理学的にどうモデル化するかの研究は、ワインライヒ(Weinreich 1953)の等位型coordinate, 複合型compound, 従属型subordinate, の類型化に始まる。その後、アーヴィンとオズグッド(Ervin & Osgood 1954)がワインライヒの類型化を連合説的心理学的モデルとして検証し、文化(言語習得の文脈)が等位型と複合型のタイプを分けるという主張をした。この研究を端緒として、このモデルの検証を試みる一連の研究が続いた(たとえば, Lambert, Havelka, Crosby 1958, Jacobovits & Lambert 1961, Kolers 1963, Ervin-Tripp 1964, Lambert, Ignatow, & Krauthamer 1968, Lambert & Rawlings 1969, Lambert 1969, Ruke-Dravina 1971, Winograd, Cohen, & Barresi 1977, Pavio & Desrochers 1980, など参照)。

たしかにこれらの一連の研究によって、言語発達（特にバイリンガリズムの発達過程）の心理過程の重要な側面が解明されるという期待はあった。しかし、これらのタイプ分類的研究は議論の分かれるまま姿を消すこととなる。この二つのタイプに分類できる被験者を現実のバイリンガルから探すには、彼らの言語習得過程はそれほど単純ではなかったからである。とりわけ、Dillon, McCormack, Petrusic, Cook, & Lafleur(1973), Diller(1974)などは、これらの分類をあまりに人為的な構成概念であると批判した。それでも、等位型と複合型というバイリンガリズムの類型論は、その後バイリンガルメモリーについてのさまざまなモデル化の試みに引き継がれた。その一つは、Kolers(1963)に始まるバイリンガルメモリーの独立仮説（independence hypothesis, 双列貯蔵または分離貯蔵モデルtwo-store/ separate-storege model）（Tulving & Colota 1970, Goggin & Wickens 1971, など参照）と、相互依存仮説（interdependence hypothesis, 単一貯蔵または共通貯蔵モデルsingle-store/ common-storege model）（Young & Saegert 1966, Lopez & Young 1974, Liepmann & Saegert 1974, Colletta 1975, McCormack 1977, など参照）の区分である。二言語の心的表象が言語によって別々で互いに独立した構造を持ち合わせているか、二言語に共通の一つの構造を持っているか、という論争が繰り広げられた。

バイリンガルの二言語（L1とL2）習得歴によって単純に二つの類型に分類する試みに比べ、その語彙構造の解明は新しい方向を切り拓くこととなった。しかし、ここでこの研究分野に一つの転換が起こる。

（2）文化の喪失

この分野も1950年代後半から始まるチョムスキー（N. Chomsky）を中心とする新認知主義的言語観の影響を受ける。言語習得と言語使用の形式モデル化の試みの大前提となる人間という生物種のもつ普遍性を信ずる立場から見ると、多様な文化的要因は理論を汚すノイズとなる。キーツレイ（Keatley 1992）は、バイリンガルメモリー研究の歴史的な流れを概観している。それによると、1970年代の後半から、多様な言語習得、言語使用の経歴を持った個人としてのバイリンガルという見方から、二つ以上の言語を所持し処理する容器としてのバイリンガルという見方へパラダイムシフトが生じた。その結果バイリンガル研究の中心課題はプロセス（心理的処理）に移り、その結果言語使用者たる個人、その習得、使用の社会文化的文脈などが顧みられなくなり、当初の言語と文化、思考との関係についての研究的関心が薄れるようになった。そのため、バイリンガルメモリーにおいて概念表象がいかに構成されるかという多面的現象が十分に研究されることがなくなり、語が複雑な意味ネットワークの中に位置づけられ、文化に固有な表象、エピソード記憶と密接な関連を持つという事実に研究の焦点が十分に向けられなくなった。

4．文化と意味の復活

1990年代に入って、バイリンガルメモリーについての心理言語学的な関心が重要な高まりを見せている。この領域の課題を扱う文献が続けて出された（Harris 1992, Schreuder & Weltens 1993, De Groot & Kroll 1997）。その中心的課題の一つが、語の意味表象と概念表象との関係についてのモデル構築である。これは、バイリンガリズムと文化、思考との関係というかつての中

心的な研究テーマの一つが復活したことを意味する。そもそもの始まりは、アーヴィン＝トリップ（Ervin-Tripp 1964, 1967）で、バイリンガルを対象とした文化比較的研究の元祖としてTAT, 語連想, SD法, 文（章）完成法など、基本的な研究方法を採用した。その後の30年あまり、バイリンガリズムと文化、思考との関係についての研究はほとんどなされない空白期間があった。この研究テーマが再び取り上げられるようになった背景には、次のような理論的関心の流れがある。

（1）文化心理学的アプローチ

1990年代の研究関心の流れとして、マーカス・北山（Markus & Kitayama 1994）の自我概念の文化比較的研究、ワズブicka（Wierzbicka 1989, 1991, 1992, 1994, 1996, 1997）の一連の文化に特有の語についての研究など、文化心理学的アプローチへの注目が挙げられる。

（2）言語相対性仮説の再復興

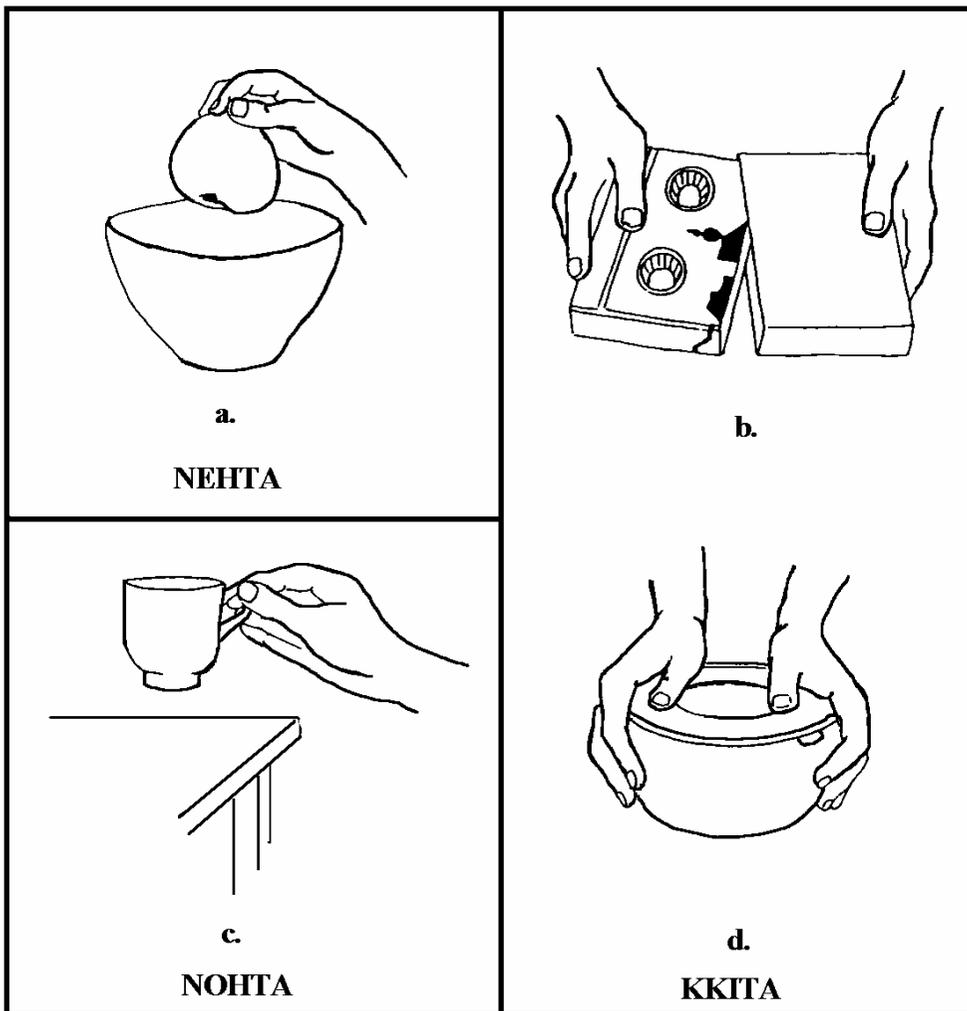
言語相対性仮説とは、たとえばウォーフ（Whorf 1956）の主張に代表されるように、異なる言語を話す人は世界についての概念も異なるだろうという仮説で、言語決定論とも呼ばれる。その後しばらくは否定的な研究結果が報告された。たとえばバーリンとケイ（Berlin & Kay 1969）は言語が異なる場合に虹などの色の表現に相違が見られるか調査した。その結果、色彩語の数は言語によって様々だったが、色彩語が2つしかないいくつかの言語を比較するとすべて白と黒の2色を指す語を持ち、色彩語が3つしかないいくつかの言語ではすべて黒、白、赤の3色を指す語を持つことがわかった。言語が異なっても色を差す語は共通だったのである。また、ロッシュ（Rosch 1973）はニューギニアのダニ人とアメリカ人を対象に概念のプロトタイプ（典型例または最適例）について比較した。ダニ語には色彩語が2つしかなく、円や四角といった形を表す言葉がない。そのダニ人に英語にある色彩語や形を表す語を学習させたところ、たとえば色々な赤色（暗い赤から鮮やかな赤）の中から最も赤らしいと思う赤を選択させると、それはアメリカ人が選ぶ最も赤らしい赤に一致した。言語の違いが世界の概念化に反映しないことを意味し、言語相対性仮説が支持されない結果となった。

ところが近年、この言語相対性仮説を支持する結果を得た研究が相次いだ。たとえばルーシー（Lucy 1996）の時間概念の比較研究やパウワーマン（Bowerman 1989, 1996）の空間概念、空間認知の比較研究、ミウラとオカモト（Miura & Okamoto 1989）の数概念の比較研究などがそれである。パウワーマン（1989, 1996）は英語と韓国語の空間語彙の違いに注目した。たとえば、英語では指輪をはめる（put on）こととリンゴを容器に入れる（put in）ことを表現上区別しているが、韓国語では指と指輪、リンゴと容器がともにぴったり接着している状態であるために同一の表現をする。ここからアメリカ人と韓国人の空間認識の基準が異なると推測される。実際、初語を発話する以前の段階ですでに、英語で育児されているアメリカの乳児と韓国語で育児されている韓国の乳児の間に、空間認識の違いが見いだされたのである。空間関係の認識が、育児に使われる言語の違いの影響をすでに受けていると言える（図2参照）。

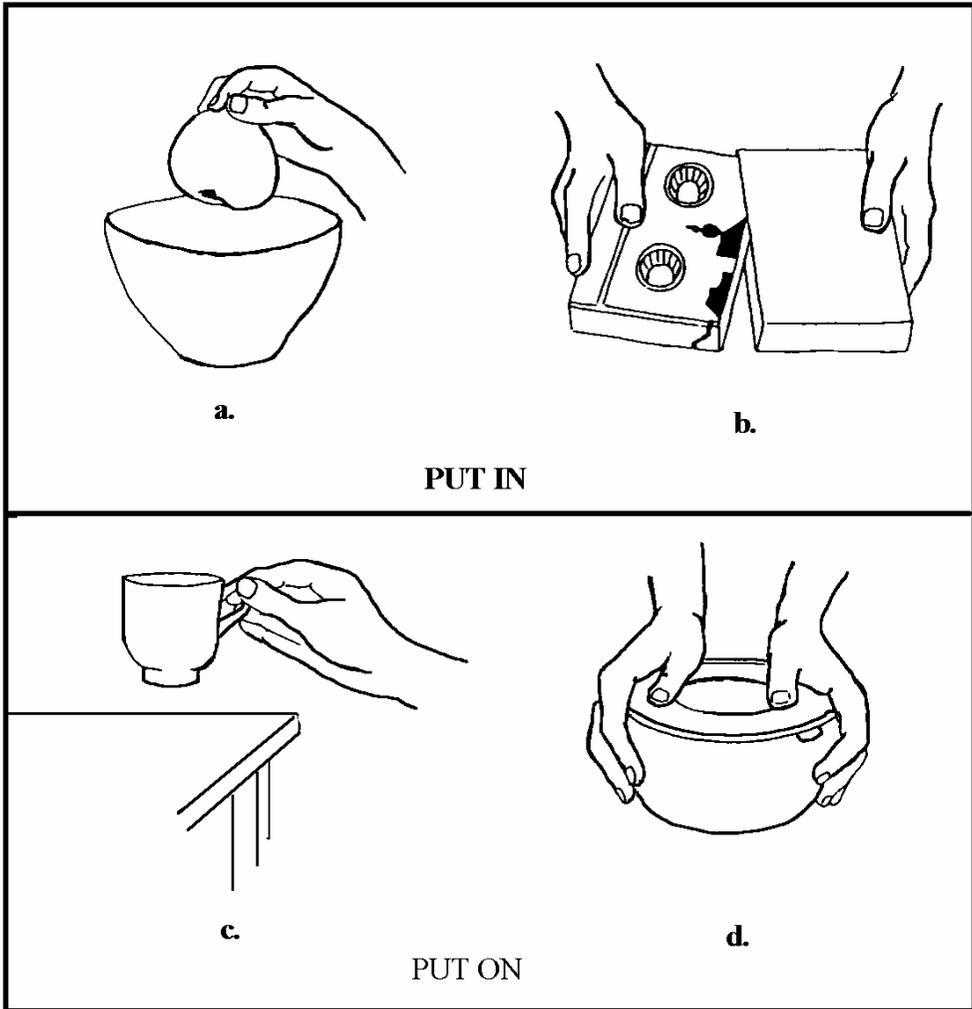
図2 . 英語とハンゲルの比較

Bowerman, M. (1996). In J. Gumperz & S. Levinson(eds.)pp.152-153 から引用

KOREAN



ENGLISH



このような言語相対性仮説の復活によって、バイリンガルが有する語の意味表象を研究するに際して、その語をどのような文化的文脈の中で獲得したかという点に再び関心が戻ってきた。これらの動きは、ピアリストクとハクタ (Bialystok & Hakuta 1994) の言葉を借りれば、「文化の復活」とも呼べる視点の変化である。

(3) バイリンガルの概念表象

語や発話の理解、文の産出が可能となるためには、視覚的ないしは聴覚的な心的表象が意味的表象と関連付けられ、それが言語使用者間で部分的にも共有され、コミュニケーションによる意味のやりとりが可能となっていなければならない。このような意味的表象があるおかげで、外界の事物やその抽象的概念を理解したり、説明したり、分類したりすることが可能となる。このような一般的に認められている「意味的表象」の存在を前提に「概念」を定義すると、概念とは心的表象で、特定の言語・文化集団に属するメンバー同士がお互いに共有する形で外界についての情報を指し示

し、理解し、推論し、分類することを可能とするものである。しかも、言語的能力を失ったメンバーでさえ、概念によるこれらの心理的作業は失われない。語の形式的、語彙的な表象と意味的表象は失語症の影響を受けるが、概念的表象はその影響を受けないことが知られている。

リクールとジャネット (Lecours & Joannette 1980)、パラディス (Paradis 1997) によると、全失語患者が非言語的概念表象によって完全なコミュニケーションを可能としている例が報告されている。またカプラン (Caplan 1992) は、失名症 (記名不全症 *anomia*) の患者は、物の名前を言うことはできないが、それらを適切に分類することはできると報告している。

さらに、パヴレンコ (Pavlenko 1999) によると、外国語学習と第二言語習得の違いを指摘している。英語を外国語として学習したロシア人と英語を第二言語 (教室外に自然な英語環境に接する機会のある) とするロシア人は、両者共に英語の概念である “privacy” や “personal space” を意味的に定義付けることはできた。しかしこの語を英語を母語とするアメリカ人と同じように使用できたのは後者の、第2言語としての英語習得者ロシア人の方であった。後者のロシア人は、“privacy” や “personal space” という語だけでなく、日常生活体験の中から得たその概念 (非言語的表象: イメージ的表象やスクリプト表象) を持っていると考えられる。

5. 帰国児童生徒の外国語保持とバイリンガリズム研究

帰国児童生徒の外国語保持については、そのプロセスや言語能力の様々な様相の変化を対象とした研究がなされてきた。たとえば、吉田・荒井 (1990) によると、英語のリスニング能力を復唱によって測定し、文法と形態素の正確さを基準に分析している。またトミヤマ (Tomiyama 1999)、ヨシトミ (Yoshitomi 1999)、リーツ=倉重 (1999) およびハンセンとリーツ-クラシゲ (Hansen & Reetz-Kurashige 1999) においては、追跡調査で構造的会話と自由会話によりデータを収集し、コードスイッチ、言い換え、言いよどみ、ポーズの多用など英語語彙の想起に伴う苦勞の増大や流暢さの喪失、ならびに形態素や文法についての正確さ、発音の正確さなどを分析し、言語能力の様相の間に保持されやすいものと失われやすいものがあることを明らかにしている。

また、外国語の言語行動として観察測定される保持水準の保持、低下の背景にある認知能力に関する研究分野がある。外国語能力の低下が観測される一方で、外国語の認知的処理過程や語彙記憶 (バイリンガルメモリーないしは心内辞書) も同様の变化を受けているかどうか、認知的課題の遂行結果から推測する方法が採られる。たとえば、中沢 (1989b, 1990) では、ペイビオとランバート (Pavio & Lambert 1981) の二重コーディング仮説に基づくバイリンガルの語彙再生実験をもとに、帰国児童生徒の心的語彙構造を推測している。提示された語彙を日本語の平仮名で再生する課題においては、それがどのようなモード (絵、英語、平仮名) で提示されたかでその再生率が異なる。すなわち、語彙を絵で提示された場合は、その語彙のイメージ的表象と言語的表象の2重の手がかりが得られるために絵で提示された語彙の再生率が最も高くなる。一方、語彙が平仮名で提示された場合、言語的表象のみしか得られずに語彙の再生率が最も低くなる。では英語で提示された語彙を平仮名で再生する場合はどうか。帰国児童生徒では英語で提示された語彙の再生率は絵と平仮名の場合の再生率の中間となるバイリンガル型のパターンを示したのに対し、その帰国児童生徒よりも英語力測定テストの成績が上回る日本の一般大学生では英語で提示された語彙の再生率が

かなり高くなる結果が得られた。表面上の英語力の低下にもかかわらず、帰国児童生徒の心的語彙構造にはバイリンガルと共通の特徴が見られたのである。

一方、帰国児童生徒は日本におけるバイリンガリズム研究にとっても重要な対象の一つとなってきた。その理由の一つとして、欧米の比較的類似した2言語を対象して得られたバイリンガリズムの研究結果が、欧米系言語とかなり系統の異なる日本語によるバイリンガリズムにも一般化できるか、またさらなる新しい知見が得られるか、という研究的関心が挙げられる。

ただし、日本語をレパートリーに含むバイリンガルとしては、たとえば在外の日系人や日本語と母語を使用する日本在住の外国籍人もその対象となる。帰国児童生徒もそのような日本語をレパートリーとするバイリンガルの一群として取り上げられたのであろうか。言い換えれば、帰国児童生徒自体よりも、彼らが持つ日本語とそれ以外の言語とのバイリンガリズムにのみ関心が寄せられたのだろうか。これまで見てきたように、バイリンガリズムについての最近の研究動向によれば、特にバイリンガルの語彙や概念といった心的表象を扱う場合、その言語使用の文化的場面を捨象して心的構造の普遍性にのみ注目する流れが、近年見直されつつある。帰国児童生徒の英語保持の心理過程を解明する試みとして、英語を習得した文化環境を視野に入れながら、語彙や概念を対象とするバイリンガルメモリー研究に意義が再び見いだされたといえる。そこで本論では、帰国児童生徒の英語保持をバイリンガルメモリーという心理過程と言語使用の文化的環境との関連からとらえるための基礎的なデータを得る調査を行った。

方 法

1. 予備調査の概要

帰国児童生徒が英語圏滞在中に英語によるどのような言語生活を体験しているかを予備的に調査し、最終的に彼らが日本に帰国する直前の英語語彙能力を推し量る手がかりを得ることを目指した。

表1. 予備調査の対象

		回収数	有効数	無効数
A校	男	22	21	1
	女	19	16	3
	計	41	37	4
B校	男	30	25	5
	女	21	21	0
	計	51	46	5
総計		92	83	9

平成13年6月下旬に、東京学芸大学海外子女教育センター（現、国際教育センター）を通じてカナダ国内の日本語補習授業校2校（本論ではA校、B校と称する）に調査用紙を配布し、10歳から15歳の在籍児童生徒に回答してもらった。回収の状況は表1の通りである（表1）。また、質問の内容は主に海外滞在の状況と以下の課題である。なお、回答時間の目安は30分以内で、辞書などを参照しない条件で自宅での回答も認めた。

2. 課題

(1) 言語活動における英語使用の選好

読む, 書く, 話す, 聴く, 計算, 買い物, テレビ視聴において, 英語と日本語のいずれを使用したいと思うか, 選択する。

(2) 文法的判断

文法的にも意味的にも正しい英文(7a, 7d, 7g), 文法的に正しくない英文(7b, 7e, 7h,), 文法的には正しいが意味的には正しくない英文(7c, 7f, 7i)のそれぞれについて, 文法的な正しさを意味的な正誤に関わらず判断できるかどうかを判定する課題である。

- 7a. Why is the dog barking so loudly? (正)
- 7b. Why the dog is barking so loudly? (誤)
- 7c. Why is the cat barking so loudly? (正)
- 7d. Birds are flying over the house. (正)
- 7e. Birds are flying the over house. (誤)
- 7f. Frogs are flying over the house. (正)
- 7g. Knives are used for cutting paper. (正)
- 7h. Knives are using for cutting paper. (誤)
- 7i. Knives are used for cutting hair. (正)

(3) 言語運用判断

文法的には正しいが, 日本語文化的な制約を反映した英文が英語の文として通用するかどうか判断する課題である。予備調査の時点では, 日本語文化的な制約を反映した文を英語の文として正しいと判断する場合にそれを誤反応と仮定するが, 今後の継続調査によってはその基準を変更する可能性はある。

- 8a. Elephants have long noses. (誤)
- 8b. A rainbow has seven colors. (誤)
- 8c. As we get older, we easily have our legs cut only by fall ing on a street. (誤)
- 8d. Most children draw a sun and paint it in red. (誤)
- 8e. pour water in a cup noodle and usually wait about three minutes. (正)
- 8f. An orange cat is usually painted in the same color as an orange. (誤)
- 8g. An mailbox is usually painted in red. (誤)
- 8h. People say “ Congratulations! ” for celebration of a woman's wedding. (誤)

(4) 「cで始まる英単語」の語彙想起

「cで始まる英単語」をできるだけ多数, 順不同に書き出す課題である。

(5) 「身体部位名称」の語彙想起

身体部位名称の英単語をできるだけ多数、順不同で書き出す課題である。

(6) 英語自由記述

本論では分析しないが、上記以外に「先週の日曜日にしたことを日記風に英語で記述する」「絵を見て自由に英語の文章を作成する」「好きなゲームやテレビ番組、暇なときにすることを英語で自由に記述する」課題も実施した。

3. 分析方法

ここでは調査対象のカナダ在住の日本人児童生徒をその通算滞在期間(月数)と調査時年齢の中間値によって4つのグループ、すなわち小学年齢(10~11歳)の、短期滞在群、長期滞在群、中学年齢(12~15歳)の、短期滞在群、長期滞在群に分けて結果を集計した。

結果

1. 各言語活動において英語使用を好む割合

表2の通り、読む、書く、話す、聴く、計算、買い物、テレビ視聴において、全体的には年齢段階に関わらず滞在期間が長い方が英語使用を好む割合が高くなる。ただ、「読む」においては滞在期間による違いは見られず、むしろ年齢段階の影響が明らかである。また「テレビ視聴」では滞在期間、年齢段階ともに影響がみられず、どのグループでも英語の方がよいという回答は30%強にとどまっている。また、全体を通して英語使用を好む割合は半数に達せず、最近の海外日本人児童生徒の言語生活にお英語使用の実態がうかがわれる。

表2. 各言語活動において英語使用を好む割合(%)

読む	短期滞在	長期滞在
10~11歳	20.0	20.0
12~15歳	63.6	63.2

計算	短期滞在	長期滞在
10~11歳	11.1	36.4
12~15歳	33.3	52.6

書く	短期滞在	長期滞在
10~11歳	26.3	40.9
12~15歳	26.3	42.1

買い物	短期滞在	長期滞在
10~11歳	44.4	59.1
12~15歳	33.3	44.4

話す	短期滞在	長期滞在
10~11歳	42.1	72.7
12~15歳	35.0	55.6

TV視聴	短期滞在	長期滞在
10~11歳	36.8	35.0
12~15歳	31.6	25.0

聴く	短期滞在	長期滞在
10~11歳	20.0	38.1
12~15歳	30.0	36.8

2. 文法的判断

提示文(7c)(7f)(7i)は、意味的には不整合であるが文法的には正しいと判断できるかどうか、4グループでその正答率をみた(表3)。これによると小学生段階で、在期間が長くなると文

法的判断が意味的不整合に惑わされる傾向が見られる。すなわち、文法的には正しくても意味的に正しくない場合、その文を文法的にも誤りであると判断してしまう。

表3．文法的判断（正答率％）

7c	短期滞在	長期滞在
10～11歳	33.3	27.3
12～15歳	33.3	38.9

7f	短期滞在	長期滞在
10～11歳	43.8	22.7
12～15歳	30.0	42.1

7i	短期滞在	長期滞在
10～11歳	47.1	33.3
12～15歳	40.0	36.8

（8a）～（8h）の提示文について、日本語や日本文化の言語運用に判断が影響されたとと思われる回答（仮定した誤まりを「正しい」と判断した回答）の割合を見ると表4の通りである。

これによると、わずかではあるが滞在期間が長いほど日本語的な言語運用の影響が低下する傾向が見られる。

表4．言語運用判断(正答率％)

8a	短期滞在	長期滞在
10～11歳	50.0	36.4
12～15歳	55.0	68.4

8e	短期滞在	長期滞在
10～11歳	41.2	36.4
12～15歳	45.0	47.4

8b	短期滞在	長期滞在
10～11歳	100.0	100.0
12～15歳	100.0	100.0

8f	短期滞在	長期滞在
10～11歳	44.4	50.0
12～15歳	50.0	44.0

8c	短期滞在	長期滞在
10～11歳	29.4	28.6
12～15歳	25.0	0.0

8g	短期滞在	長期滞在
10～11歳	94.4	81.8
12～15歳	95.0	79.0

8d	短期滞在	長期滞在
10～11歳	82.4	77.3
12～15歳	70.0	68.4

8h	短期滞在	長期滞在
10～11歳	76.5	77.3
12～15歳	75.0	68.4

4．語彙想起

「cで始まる英語語彙」（図3）および「身体部位名称英語語彙」（図4）を順不同にできるだけ多く想起する質問に対する回答を語彙数で見ると次の通りである。いずれも滞在期間と年齢の相互の影響が認められ、とりわけ小学校段階では滞在期間が短いと想起数が少なくなり、逆に中学校段階では滞在期間の影響が相対的に弱くなる。

図3 . cで始まる英語語彙想起

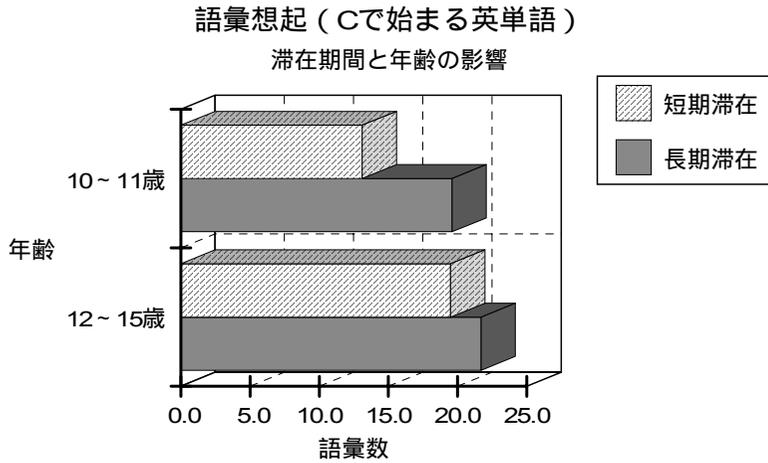
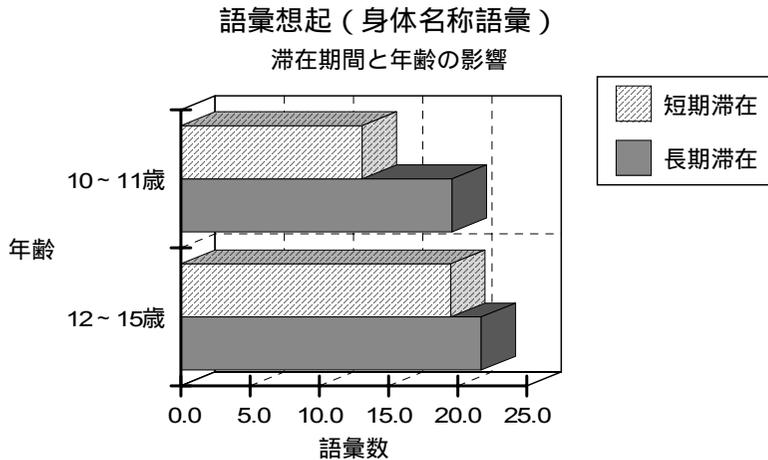


図4 . 身体部位名称英語語彙想起



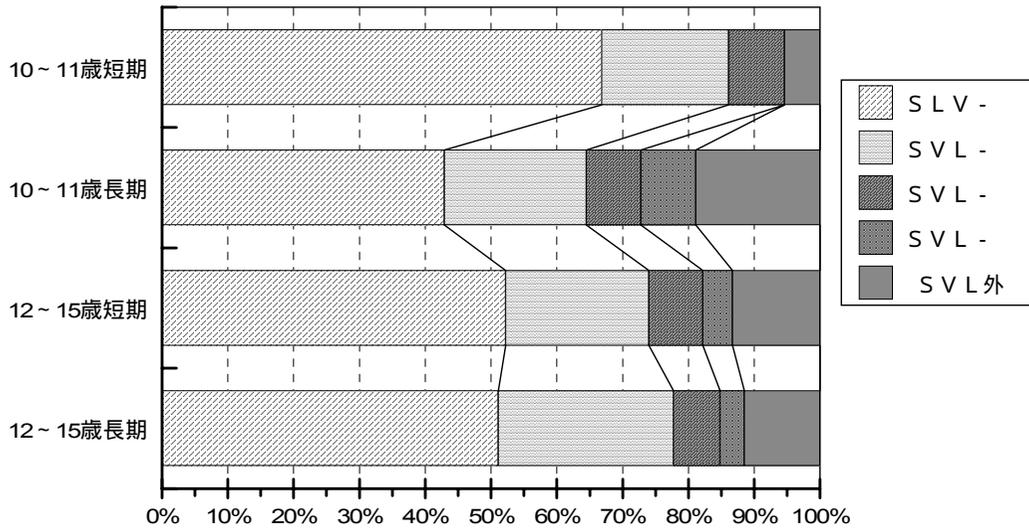
5 . 語彙頻度

「Cで始まる語彙」で想起された語彙は、一般的に知られている語彙頻度リストのどの水準に位置しているか、滞在時期（10～11歳 / 12～15歳）と滞在期間（短期 / 長期）によって比較した。用いた語彙頻度リストは「標準語彙水準」（SVL12000 : Standard Vocabulary List. アルク。詳細はhttp://www.alc.co.jp/goi/what_is_SVL.htm参照）である。SVLは1～12の水準からなる語彙頻度リストで、ここではそれを4分割（～）にまとめ、SVLに含まれない語彙と併せて5段階にまとめた。その結果は図5の通りである。これからわかることは、10～11歳グループ

では明らかに短期滞在群よりも長期滞在群の方が語彙水準が高い（すなわち頻度の低い語彙が多い）。それに対し、12～15歳グループでは滞在期間による差は明らかではない。

また、SVLリストに含まれない語彙は、必ずしも語彙水準が高いという訳ではないが、固有名詞や俗語、高度の専門用語など、英語圏での言語生活経験の影響が見られる語彙とも考えられるので、資料として掲載する。

図5. 「cで始まる語彙」SVL頻度別分布



考 察

本論では、帰国児童生徒の英語保持の心理過程と文化的要因の関連を解明するための理論的枠組みを考察し、そのモデル化を試みるための予備調査の結果を分析することであった。英語保持のプロセスを追跡するために、まず帰国児童生徒が英語圏での言語生活においてどのような英語力を有するか、ベースラインとなるデータが必要となる。ここでは、(1) 言語使用活動における英語の選好の程度、(2) 英語の文法的判断（意味的には不整合で文法的には正しい文の判断）、(3) 言語運用判断（文法的に正しいが、意味的には文化によって正誤が異なる文の判断）、および(4) 「cで始まる英語語彙」と「身体部位名称」を自由想起する課題によってその手がかりを得ることを試みた。

まず、英語圏で生活する日本人児童生徒は、言語生活場面で英語使用を好む者の比率は全体的に

半数に達しない。もちろんこれは彼らが実態として英語をそれほど使用していないということではないが、調査した地域において日本語環境から隔絶して暮らしているわけではないことが推測される。

文法判断については、特に10～11歳段階の児童において、滞在期間が長いほど文法判断が意味に左右される傾向が見られた。児童期のバイリンガルの方がモノリンガルよりもメタ言語意識が高まるとすれば（たとえば、ベン・ジーフ Ben-Zeev, 1977）、今回の結果はその予想に反するようと思われる。

言語運用上の判断においては、文の正しさの判断にそれほど日本語文化と英語文化との違いが明確に表れていない。文法的に正しければ、英語で表記されているにもかかわらず日本語文化に制約された内容の文でも、英語文として通用すると判断している。

語彙想起においては、10～11歳の児童段階において滞在期間の長短が大きく影響している。平均語彙数についても、また語彙頻度リストによる語彙水準についても、児童期において長期滞在する（すなわち言語習得開始期のころから滞在している）児童の方が想起する語彙数も多く、語彙水準も高い。12～15歳の中学生期では滞在期間の長短の影響が相対的に弱い。

今後、日本への帰国時点を英語保持の「潜伏期間」として追跡調査して、どの語彙が保持され、どの語彙が喪失されるか、また文の判断に文化的・意味的な制約がどの程度反映されるか明らかにすることで、英語保持の心理過程と文化的要因の関連についてアウトラインを描きたい。

参考文献

- Ben-Zeev, S. (1977). Mechanisms by which children bilingualism affects understanding of language and cognitive structures. In *Bilingualism: Psychological, Social, and Educational Implications*, ed. by P.A. Hornby, pp.29-56. New York: Academic Press, Inc.
- Berlin, B. & P. Kay. (1969). *Basic color terms: their universality and evolution*. Berkeley: University of California Press.
- Bialystok, E. & K. Hakuta. (1994). In other words: The science and psychology of second-language acquisition. UK. BasicBooks, A Division of HarperCollins Publishers, Inc. (重野純訳 『外国語はなぜなかなか身につかないか - 第二言語学習の謎を解く』新曜社 2000)
- Bowerman, M. (1989). Learning a semantic system: what role do cognitive predispositions play? *The teachability of language*, ed. by M. L. Rice and R. L. Schiefelbusch, pp.133-169. Baltimore: Brookes.
- Bowerman, M. (1996). The origins of children's spatial semantic categories: Cognitive versus linguistic determinants. In *Rethinking linguistic relativity*, ed. by J. Gumperz & S. Levinson, pp.145-176, Cambridge: Cambridge University Press.

- Caplan, D. (1992). *Language: Structure, processing, and Disorders*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Colletta, S. P. (1975). "Same-different" judgements with bilinguals. Unpublished M.A. thesis, Carleton University. Cited in P.D. McCormack, *Bilingual linguistic memory: The independence-interdependence issue revisited*. In *Bilingualism: Psychological, Social, and Educational Implications*, ed. by P.A. Hornby, New York: Academic Press, Inc. 1977.
- De Groot, A., & J. Kroll (eds.), (1997). *Tutorials in bilingualism. Psycholinguistic perspective*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Diller, K. (1974). "Compound" and "coordinate" bilingualism: A conceptual artifact. *Word*, 26, 254-261.
- Dillon, R. F., P. D. McCormack, W. M. Petrusic, G. M. Cook, & L. Lafleur. (1973). Release from proactive interference in compound and coordinate bilinguals. *The Bulletin of the Psychonomic Society*, 2, 293-294.
- Ervin, S. M. & C. Osgood. (1954). Second language learning and bilingualism. In *Psycholinguistics. Journal of Abnormal and Social psychology*, ed. by C. E. Osgood & T. A. Sebeok, 49, Supplement, pp.139-146.
- Ervin-Tripp, S. (1964). Language and TAT content in bilinguals. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 68, 5, pp.500-507.
- Ervin-Tripp, S. (1964). An analysis of the interaction of language, topics, and listener. *American Anthropologist*, 63, 6 Part 2, pp.86-102.
- Ervin-Tripp, S. (1967). An Issei learns English. *Journal of Social Issues*. 23, pp.78-90.
- Gardner, R. G. (1982). Social factors in language retention. The loss of language skills, ed. by R. D. Lambert & B. F. Freed, 24-43, Rowley, MA: Newbury House Publishers, INC.
- Goggin, J. & D. D. Wickens. (1971). Proactive interference and language change in short-term memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 10, pp.453-458.
- Hansen, L. & A. Reetz-Kurashige. (1999). Investigating second language attrition: an introduction. *Second language attrition in Japanese contexts*, ed. by L. Hansen, 3-18. New York, New York: Oxford University Press, Inc.
- Harris, R. (ed.) (1992). *Cognitive processing in bilinguals.*, North Holland: Elsevier Science Publishers Jacobovits, L. and W. E. Lambert, (1961). Semantic satiation among bilinguals, *Journal of Experimental Psychology*, 2, pp.576-582.
- Keatley, C. (1992). History of bilingualism research in cognitive psychology. In *Cognitive processing in bilingual*, ed. by R. Harris, pp.15-49. Amsterdam/London: North Holland. Elsevier Science Publishers.
- Kolers, P. A. (1963). Interlingual word associations. *Journal of Verbal Learning and*

- Verbal Behavior, 2, pp.291-300.
- Lambert, W. E. (1969). Interdependencies of the Bilingual's Two Languages, Substance and Structure of Language, ed. by J. Puhvel, University of California Press, pp.99-126. Also, Lambert, W. E. (1972), Language, Psychology, and Culture: Essays by Wallace E. Lambert. Stanford University Press, pp.300-330.
- Lambert, W. E., J. Havelka, & C. Crosby. (1958). The influence of language acquisition contexts on bilingualism. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 56, pp.239-244.
- Lambert, W. E., M. Ignatow, & M. Krauthamer. (1968). Bilingual Organization in Free Recall, *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 7, 312-316.
- Lambert, W. E. and C. Rawlings, (1969). Bilingual processing of mixed-language associative network. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 8, pp.604-609.
- Lambert, R. D. & B. F. Freed. (1982). The loss of language skills. Rowley, MA: Newbury House Publishers, INC.
- Lecours, A. & Y. Joannette. (1980). Linguistic and other aspects of paroxysmal aphasia. *Brain and Language*, 10, pp.1-23.
- Liepmann, D. & J. Saegert. (1974). Language tagging in bilingual free recall. *Journal of Experimental Psychology*, 103, pp.1137-1141.
- Lopez, M. & R.K. Young. (1974). The linguistic interdependence of bilinguals. *Journal of Experimental Psychology*, 103, pp.981-983.
- Lucy, J. (1996). The scope of linguistic relativity: An analysis and review of empirical research. In *Rethinking linguistic relativity*, ed. by J. Gumperz and S. Levinson, pp.37-69, Cambridge: Cambridge University Press.
- Markus, H., & S. Kitayama. (1994). The cultural construction of self and emotion: Implication for social behavior. In *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influence*, ed. by S. Kitayama & H. Markus, pp.89-130. Washington, DC: APA.
- McClelland, J. L. & D. E. Rumelhart. (1981). An interactive-activation model of context effects in letter perception, Part1: An account of basic findings. *Psychological Review*, 88, pp.375-405.
- McCormack, P. D. (1977). Bilingual linguistic memory: The independence-interdependence issue revisited. In *Bilingualism: psychological, social, and educational implications*, ed. by P. A. Hornby, pp.57-66. New York: Academic Press.
- Miura, I., & Y. Okamoto. (1989). Comparisons of U.S. and Japanese first graders' cognitive representation of number and understanding of place value. *Journal of Educational Psychology*, 81, pp.109-113.
- 中沢保生. (1989b). 「帰国子女の外国語処理過程とその測定方法について：語彙再生実験による日本語と外国語の語彙2重コーディングの実態の分析」, 帰国子女の外国語保持に関する調査研究

- 報告書－昭和63年度，財団法人海外子女教育進行財団，pp.29-59
- 中沢保生. (1990). 「帰国子女の外国語の心理的処理過程と習得期の関係についての予備的考察 - 日本語と外国語の語彙二重コーディングの観点から - 」，清泉女学院短期大学研究紀要第8・9合併号，pp.1-13
- Paradis, M. (1997). The cognitive neuropsychology of bilingualism. In *Tutorials in bilingualism. Psycholinguistic perspectives*, ed. by A. De Groot & J. Kroll, pp.331-354, Mahwah, NJ.: Lawrence Erlbaum.
- Pavio, A. & A. Desrochers. (1980). A dual-coding approach to bilingual memory. *Canadian Journal of Psychology*, 34, pp.388-399.
- Pavio, A. & W. E. Lambert. (1981). Dual coding and bilingual memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, Vol.20, pp532-539.
- Pavlenko, A. (1999). New approaches to concepts in bilingual memory, *Bilingualism: Language and Cognition*, 2, 3, pp.209-230.
- Rosch, E. (1973). On the internal structure of perceptual and semantic categories. *Cognitive development and the acquisition of language*, ed. by T. M. Moore, pp11-44, New York: Academic Press.
- Ruke-Dravina, V. (1971). Word associations in monolingual and multilingual individuals. *Linguistics*, 74, pp.66-84.
- Schreuder, R., & B. Weltens(eds.). (1993). *The bilingual lexicon*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins
- Tomiyama, M. (1999). The first stage of second language attrition: A case study of a Japanese returnee. *Second Language Attrition in Japanese Contexts*, ed. by L. Hansen, pp.59-79., New York: Oxford University Press, Inc.
- Tulving, E. & V. A. Colota. (1970). Free recall of bilingual lists. *Cognitive Psychology*, 1, pp.86-98.
- Weinreich, U. (1953). *Language in Contact* New York: Linguistic Circle of New York
- Whorf, B. L. (1956). *Language, thought, and reality: selected writings of Benjamin Lee Whorf*, ed. by J. B. Carroll, Cambridge, MA: MIT Press. (池上嘉彦訳，1978，『言語・思考・現実 - ウォーフ言語論選集』弘文堂)
- Wierzbicka, A. (1989). Soul and mind: Linguistic evidence for ethnopsychology and cultural history. *American Anthropologist*. 91, pp.41-58.
- Wierzbicka, A. (1991). *Cross-cultural pragmatics: The semantics of human interaction*. Berlin/New York: Mouton De Gruyer.
- Wierzbicka, A. (1992). *Semantics, culture, and cognition: Universal human concepts in culture-specific configurations*. Oxford: Oxford University Press.
- Wierzbicka, A. (1994). Emotion, language, and cultural scripts. In *Emotion and culture:*

- Empirical studies of mutual influence, ed. by S. Kitayama & H. Markus, pp.133-196. Washington, DC: APA.
- Wierzbicka, A. (1996). *Semantics: Primes and universals*. Oxford: Oxford University Press.
- Wierzbicka, A. (1997). Understanding cultures through their concrete and abstract words in bilingual speakers. *Memory and Cognition*, 4, pp.323-329.
- Williamson, S. G. (1982). Bibliography: language skill attrition project. Appendix B, in *The loss of language skills*, ed. by R. D. Lambert & B. F. Freed, 227-238. Rowley, MA: Newbury House Publishers, INC.
- Winograd, E., C. Cohen, & J. Barresi. (1977). Memory for concrete and abstract words in bilingual speakers. *Memory and Cognition*, 4, pp.323-329.
- 吉田研作, 荒井貴和. (1990). 「海外子女の外国語リスニング能力の保持に関する考察」。吉田研作, 八代京子, 中沢保生 (編著) 『帰国子女の外国語保持に関する調査研究報告書』, 海外子女教育振興財団, pp.9-28。
- Yoshitomi, A. (1999). On the loss of English as a second language by Japanese returnee children. In L. Hansen. (ed.) *Second Language Attrition in Japanese Contexts*, pp.80-111., New York:Oxford University Press, Inc.
- Young, R. K. & J. Saegert. (1966). Transfer with bilinguals. *Psychonomic Science*, 6, pp.161-162.

< 付 記 >

本研究は東京学芸大学海外子女教育センター「言語間適応プログラム」プロジェクトでの研究の一環として実施された調査に基づく。また収集された語彙のリスト化には KWIC Concordance for Windows Version 4.6 (Copyright (C) 2001 . 塚本聡 . www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/tukamoto/) を利用した。

補足資料：「Cで始まる英語語彙」で想起されたSVLリスト外の語彙

10～11歳		12～15歳	
短期	長期	短期	長期
calender	cabal	carnivore	cad
Canada	caboose	carnivorous	caboose
cans	cackle	carob	cacao
carnation	cacophony	carpool	cackle
CD	Caesar	carrey	calcite
cellphone	caffeine	carsick	California
chalkboard	caftan	cartilage	Canada
cheque	cagey	cartography	Canadian
clipboard	cain	carton	Capitol
	cajole	caster	caramel
	cajun	cay	cardiovascular
	calender	CD	carton
	calf	cellphone	castaway
	Calgary	centipede	Celsius
	calico	chameleon	chimp
	California	chandelier	China
	calligraphy	chariot	Chinese
	calypso	checkers	chive
	cameo	China	cinnamon
	campfire	Chinese	Cleveland
	Canada	chipmunk	cliffhunger
	Canadian	ciao	climber
	canned	claywort	co
	cannibal	cobra	cobra
	cantaloupe	collie	coca
	canter	constipate	cocobean
	caper	crabapple	Columbus
	CapeTown	crepe	compactdisc
	capillary	Cuba	condo
	cappuccino	cursive	corny
	capsize	cyclops	cox
	caramel		crankshaft
	carat		craw
	carburetor		crayfish
	caregiver		Cuba
	Caribbean		culvert
	carjack		cupcake
	carnation		
			cameo
			Canada
			Capricorn
			capris
			caribou
			cartwheel
			Casper
			caviar
			caw
			CD
			Cerberus
			chameleon
			China
			Chinese
			chronograph
			cinnamon
			claustrophobic
			Cleopatra
			clung
			coaster
			cobra
			cocacola
			colosseum
			Columbia
			Columbus
			cougar
			creche
			crimp
			cringle
			crispy